

露の現在を解きほぐすためには、露の過去の日々を知らねばならないことを、千枝は、由利子との会話から気づかされていた。

(おばあちゃんの過去の日々……)

千枝の脳裏に、露の本箱にある何十冊ものノートが浮かんだ。

露の日記帳である。

筆まめな露が若い頃から日記をつけていることは知っていた。

(あの中には、おばあちゃんの人生のすべてが詰まっているかも知れない……)

しかし、その想念を、千枝はいったんは打ち消した。

人の日記を無断で開いてみようなどと思いついた自分自身が恥かしかつた。けれども、打ち消しても、打ち消しても、その思いは、むくむくと起き上がってきた。

起き上がってきた。

化粧をする露が、何かを必死に訴えているような気がしてならなかった。

悲鳴を上げながら、助けを求めているような気がしてならなかった。

黙って見過ごすには、露があまりに哀れな気がした。

だが一方では、自分自身のためにも、露の真実を知りたい、と願った。

化粧をする露をはじめて見た日から、日ごとに

自分の中に堆積してくる重いものを千枝は自覚していた。

それは、露に対するある種のうとましさであることは確かだった。

たまりにたまったその思いが、いつかははけ口を見つけて溢れ出してくる。千枝はその日を恐れた。

あくまでも最後まで人間らしく、露と自分のかかわりを終結させねばならない。

(おばあちゃん、やっぱり日記を開かせて下さい……)

朝の光が射しそめた窓ガラスに、背を丸めた露の姿が幻影となつて浮かび上がった。

その時であった。

「あつ……。」

千枝の胸に、思いがけない光景がまるで映画のひとこまのようにくつきりと映った。

圭吾と深いかかわりのある光景であった。

そして、それはやがて一つの疑心となつてみる千枝の中に広がり始めた。

「……そうなるには、一つのきっかけがあるみたいね。」

昼間聞いた由利子の言葉が思い出された。

(きっかけ……きっかけ……いや……まさか

……。でも……やっぱりそうかも知れない)

自問自答をくり返した。

(あなた、そうなの?)

瞼の圭吾に問うてみたところで、返事の得られるはずもなかった。

露が起き出したらしく、部屋の方から、こここ

い人たちの上に降りそそいでいた。

すがすがしい初夏の季節も、戸外で働く者にとってはもう汗にまみれる時期であった。

十町歩ほどの田畑を小作にまかせ、当主の信次が県庁へ勤めている長山家では、格別、農繁期に振りまわされることもなく、日頃と同じ明けくれが、淡々と繰り返されていた。

女学校を卒業した翌年、露が十歳年上の信次に嫁いだから、もう四年が過ぎようとしている。

この四年間に、相次いで、舅、姑が亡くなった。きょうだいといえは、隣村の豪農へ嫁入っている姉の佐紀と二人だけの信次は、長男とし

とと、折々小さな音が聞こえてきた。

千枝は昂ぶる思いを静めようと、大きな息を吐き出した。

春の朝の明るいしじまが、窓の外には広がっていた。

盛りを過ぎた沈丁花が、はらはらとこぼれ始めたことに、今朝の千枝は全く気がついていない風であった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

香東川の西沿いにあたる飯内村は、大正十五年の麦秋を迎えていた。

長山家の周辺に広がる一面の麦畑は熟れ色となり、透明な六月の日ざしが、取り入れに忙し

ながやまけ ざいさん そうぞく とうしゅ て長山家の財産を相続し、当主となった。

信次の様子が、少しずつ変わり始めたのはその頃からである。

彫りの深い浅黒い顔に、いつも気むづかしそうな眉根を刻みこみ、もともと口数の少ない男であったのが、さらに、笑顔を見せることは稀になった。

「お前、子供が欲しいとは思わんか」

信次が、突然、露にそういったのは、その夏、はじめて蚊帳を吊った夜であった。

灯を消した八畳の居間に、うすい月光がさしこみ、二人の布団の上に、ほの白い麻蚊帳がぼんやりと浮かんでいた。

梅雨が近いせいか、いつになく蒸し暑かった。  
露は布団の上に膝を崩し、はだけた浴衣の胸をかき合わせていた。

たった今、夫が離れたばかりの身体はまだほてりを残していた。肌がしっとり汗ばんでいるのは、蒸し暑さのせいばかりではなかった。

仰向けになって両手を頭の下にあてがい、蚊帳の天井に視線を投げたまま、信次はもう一度いった。

「お前はあまり欲しゅうないようやな。子供…。」  
露は、衿を合わせる手をとめた。

いつの日か、夫から切り出される話だとは思っていた。

夫婦となつてから四年たっているのだ。子供の話がこれまで出なかつたのが、むしろ不思議なくらいであった。

結婚に次ぐ二つの葬式、そして家督相続と、二人にとって気が休まる暇のない四年間であつたことは事実だ。だが、子供というものは、夫婦が健康でさえあれば、どんな日常生活の中にあつても生まれてくるはずであつた。

露はひそかに待っていた。しかし、一向にその兆しは現われなかつた。

女と生まれた以上は、やはり自分の身体の中のいのちを育くみ、苦しみに耐えて生み落したわが子を両の手に抱きたかつた。

先ほどの余韻が、露の中にはまだ甘い情感を残していた。

いのちを分け合つて得たわが子を抱く母親たちの表情に、露はいつも満ち足りた思いを見た。

けれども、いつかは、自分だつて、と希望をかき立てることによつて、かろうじて羨望のほむらを押さえてきたのである。

とはいえ、夫から、いつその話が出るか、と内心、恐れに似たものを抱きながら、それでも、何となく月日を過してしまつたのは、露の中にある信次への甘えのせいかも知れなかつた。

「欲しゅうないやなんて…。そんな。わたしだつて、子供を欲しいと思う気持ちは、あんたと同じやのに…」

露は、夫の胸にそつと顔を伏せた。

「子供ができんとなると、困ることになるぞ。お前、わかるだろうな。その意味は…」

信次の声音には、露の甘えを踏み砕くような冷徹なひびきがこもつていた。

露は、思わず顔を上げた。さつき、自分の耳もとに熱い息を吹きかけた人とはとうてい思えない冷たさが、露を驚かせた。

男というものは、わずか数分の間に、これほど変れるものなのか。

身内にまだくすぶつていた情念のぬくもりが、みるみる冷えていくのを覚えた。

「長山家の家系を絶やすわけにはいかん。

親から引き継いだものを、確実に次の跡継ぎに渡す。これがわしの務めじや。」

その跡継ぎがなかったらどうなる。大へんなことじや。これは…。

じゃがのう。だからというて、わしに子種がないなどとは思わんぞ。」

露は呆然としていた。

夫婦の聞ごとのあと、まるで仕事の話でもするように、理詰めの話り口をする信次が、信じられなかった。

夫の一面の、意外な肌ざわりに触れた露は、ある不気味さに似たものを胸に宿し始めていた。

露はそつと身を離した。

「お前、うちの役所の山本君、知つとるじやろう。あいつな。奥さんを離縁したそうじや。」

信次は腹ばいになると、煙草に火をつけ、さらに言葉を続けた。

「理由はな。子ができんからということじやそうな。」

投げつけるように言つて、信次は口をつぐんだ。

藍色の闇の中に、煙草の煙がほの白くたゆたうのを、露は黙って見ていた。

信次は、いったい何を言おうとしているのだろ

うか。胸の鼓動が早くなった。

「嫁して三年、子無きは去る。あの家もうちと同

じ古い家柄じや。両親たちが家系の絶えるのを心配したのも当り前じやろう。」

露は、胸の中にもみるみる高まつてくる不安を払いのけるように口を開いた。

「それで…。それで、山本さんの奥さんは、黙つて承知されたんですか」

「ああ。承知するもせんも、子供が生まれなから家が絶える、といわれたら、どうしようもないやろ。言い渡された時には、ぼろぼろ涙を流しとつたそうじやが…」

「あなただつたら、どうですか」

露の口から、自分でも思いがけない言葉が出た。

(以上1月27日放送分)